風の剥製

根岸一之

わが畏友古山正雄氏にこの句集を献じる

寺山修司はどこかで、俳句は滅びゆく文藝であるという意味のことを書いている。その文章は、なぜ寺山が一時的にではあるものの、俳句に熱中したかの弁明のような文章であった。しかし、それはともかく、その寺山一流の「滅びの美学」に魅せられて、すでにほぼ三十年が経過した。そして、俳句に深く関わるにしたがって、日本語という言語の戦慄すべき「魔術的」性能に気づかされたりもした。

ここら辺りで、私家版の句集に纏めておこうと思いついたのは、ごく最近のことである。現実に眼を移せば、当たり前に出版できたとしても、そのような「滅びゆく文藝」には、幾ばくかの読者さえ獲得出来る目処もない。とすれば、何時か誰かが発掘するまでの幾世紀を、電脳の海に沈めておくべしと決意し、ここにそれを行うこととする。

壹　未遂の領分 ―― 005
貳　鋲力の残響 ―― 086
參　アルカディィアの記憶 ―― 167
肆　熾天使の吐息 ―― 248
伍　幻聴の諧謔 ―― 329
陸　銀の福音 ―― 410
漆　蒼穹の闇 ―― 491
捌　永遠のロゴス ―― 572
玖　黒映画の振子 ―― 653

壹　未遂の領分

色彩の曠野

アンリ・ルソー

秋の日や穹（そら）の眞青といふ淵に

ラファエル前派に

オフィリアへ極（きは）まる菜の花明りかな

罌粟啓(けしひら)く王女の欲(ほ)りし首白し

花いちもんめ櫻明りにひとさらひ

春疾風追ふは遁走曲（はるはやてフーガ）の咎にして

朧夜や春畫の端（はし）に煙草盆

舌先を白く潰(けが)して春の雪

昨日なく今日なき空の石鹸玉（しゃぼんだま）

西行忌ただ曠野（あらの）なる夢の果て

海市の座標

一音（いちおん）を研ぎて一音　武滿忌

櫻桃忌愁ひの皮膜膚（はだへ）とす

雛の顔あたりに闇を餘(あま)しけり

春雨や愁ひに致死量あるごとく

應爲描(か)く惡所の闇に花ミモザ

平假名の淡きをなぞる櫻貝

曠野（あらの）吹く風の眞中を蝶の徑（みち）

海圖にはなき一點に海市消ゆ

さくらがひうまれるまへの音がする

餘白の餘白

櫻散る餘白に餘白累（かさ）ねては

白鍵のファのみ狂へる朧かな

沙羅落ちて驛に白髪（しらが）の遺失物

遠花火未完の戀の墓標とし

裏聲で經(きやう)讀む左大文字

薄暑とはトワレの壜の青き翳（かげ）

行夏や風の剥製殘す濱邊（はま）

螢狩闇の匂ひを掬(すく)ひけり

掌（てのひら）にしたたり落つる螢かな

ヂギタリスの閾（いき）

夏の朝穹（そら）の青さを穿つ鳥

きみまでの數歩の空を鳥渡る

壺庭の方形（はうげふ）に積む蟬時雨

一（いち）に神あとの一つはデギタリス

童貞やベッドサイドに薔薇のジャム

夜の桃嘴（はし）ある影に啄（ついば）まる

黒葡萄闇を一粒零しけり

月蝕やなべて貌（かほ）なきものの貌

愛咬の痕（あと）のひとつを寒椿

聖なるアナグラム

雪の夜や獨(ひと)りであそぶアナグラム

風に舞ふものを枯葉と定義する

風花や孤島に竝ぶ碑の欠片（かけら）

眞つ白な嘘吐く處女（っをとめ）　冬霞

恩寵の黒きに咲くや冬薔薇（ふゆさうび）

一行の暗號解けず冬銀河

凍蝶（いててふ）の滅ぶ最中（さなか）の世界かな

オントロギー眞夜（まよ）の海鼠（なまこ）のごとく在り

聖夜かな翼持つもの降り積もる

あるひは深爪

蒲公英（たんぽぽ）をこまかく刻む陽の光

深爪の肉じんじんと櫻桃忌

薄氷（うすらひ）へ小指の熱を頒（わ）かちけり

呪詛（じゆそ）として中島みゆき浴びて　夏

櫻散るエンドマークの虚構（うそ）くさき

梅の香（か）と風の音（ね）のみを遺留品

涅槃西風花見小路へ情死行（ねはんにし）

アンゼルム・キーファーといふ名の默示（もくし）　原爆忌

滅びゆくわれらが種族薔薇を断つ

凍蝶の域

廃帝（はいてい）の玉座濡れたる魔都の春

丑寅（うしとら）の闇の上座（かみざ）に据ゑし雛

川底に兇器（きやうき）眠りし花見かな

人麿忌　賽銭箱に鍵の穴

病むときも汝を愛せ萬愚節

花筏素木（しらき）の柩載せ　曙光

春疾風（はるはやて）根こそぎ持つてゆきにけり

鐵（くろがね）のストーヴに焼く前世かな

凍蝶（いててふ）の翅（はね）ひらくまで永劫（とは）の域

骨壺のなか

皐月かな身體（からだ）の底に青き澱

空間も時間も歪めかたつむり

人の世を脱けでるごとく更衣（ころもがへ）

バタイユ忌眼球模型賣る夜店

零時には光子（かうし）へ還（かへ）る螢かな

天と地にあはき一筋（ひとすじ）　秋櫻

皐月闇消えてなくなる人のゐる

朋ひとり失せし苦みや蕗の薹

骨壺のなかは正月かも知れぬ

貳　喇叭の残響

銀漢の裏表

祝の字を呪と視たり秋燈（あきともし）

満月や骨牌（トランプ）にある裏表

丁半の盆の白きに男郎花（をとこへし）

囀（さへづ）りをしづかに歩く暗殺者

梟（ふくろふ）の眼（まなこ）に問へば夜しんしんしん

銀漢や斃（たふ）れしものの名は中也

言葉とは煌く刃（きらめくやいば）

憂國忌

暗黒の青の側（がは）より冷えはじめ

天高く何処（どこ）より墜（ふ）りし大伽藍

非在の化石

梅雨明やマリア・カラスの喉の皺

潮の香の風従へて八月（はづき）來ぬ

梅雨冷の闇より湧ける汽笛かな

百日紅（さるすべり）死はそれぞれの色にあり

默祷（もくたう）や蝶の化石になる刹那

敬老の日に留守電の聲の無し

極月や女陰（ほと）ある人形おそろしき

百八の悔ひに響けり除夜の鐘

初夢や空をシャネルのオートバイ

如月以後

神さぶる鴉翔（と）ぶ日や紀元節

二月十四日黒く滲める文字の蹟（あと）

平假名ののの字に似たり櫻貝

木菟（みみづく）に孤獨や否や問ふ孤獨

鬱失せてそとはまみどり蓬餅

ピョートル・チャイコフスキー

花屑や花の圓舞曲（ワルツ）をあとすこし

北歸する隊商一列月天心

エミール・ガレの硝子器

夕景や床（とこ）の花瓶に秋すでに

菊枕日差し重たき午後なりき

そして殘照

ゆふされば葉や桜の散りいそぎ

螢の忌闇のなかなる闇を視る

蒼穹（あをぞら）の底ひるがへし燕（つばくらめ）

晝寢覺　蓄音機から古きジャズ

夏館（なつやかた）背後に冥（くら）き迷路あり

寫眞にはうつらぬ闇の宵祭

帝都羅馬（ロオマ）かくして滅ぶ九月盡（くぐわつじん）

秋日傘老嬢の爪あかきかな

末黒野（すぐろの）や此処は地獄の一丁目

影法師の影

蒲公英（たんぽぽ）や夢みる頃は過ぎたはず

廃市（はいし）の蝶一瞬にして紙となる

節分の鬼は肌色さりながら

紀元節見知らぬ神と睦みけり

かへり花散り曝(さらば)へる慙愧(ざんき)かな

菊人形陰謀宿す眼のひかり

愛されぬものを刺しけり冬の蜂

狂ひ花狂ふ場のなく獨り咲く

影法師ワキとしてのみ生きて　冬

あるいは猫

秋風やハモニカの尾を曳くごとく

老女より零れて白き息となる

路地裏の默（しじま）に深く師走かな

極月やテレビに竝ぶ死者の顔

虚無を啼く鴉群れとぶ憂國忌

失語せる鸚鵡と向かふ夜の雪

霜の夜や悪夢引用して睡（ねむ）る

沙羅雙樹（さらさうじゆ）

象牙（ぞうげ）

砂濱（すなはま）

影法師（かげはうし）

七種（ななくさ）や通常業務にもどる猫

未遂の喇叭

夏ゆふべ鍼力（ふりき）の喇叭（らっぱ）のたりかな

薄墨の草書降らしつ春の雨

桃色の闇を綴ぢたる雛（ひひな）かな

七月や平城（なら）の廃墟に弾丸（たま）の穴

踏む影の逃げ惑ふかな炎天下

花野ゆき歸るすべなき遠さかな

寝待月満たされざりき日記かな

老残といふ一語にて小町の忌

未遂にて了(を)はる人生(さだめ)や除夜の鐘

わが彼岸にて

わたしの忌わたしの數の水中花

星今宵帯の解かれず結ばれず

夏祭なみだの訳を問はざりき

濱日傘水平線を壜に詰め

わが街を廃墟と思ふ夏日かな

曹達（ソーダ）水架空の街に遺棄されて

海邊より來たり海へと還る夏

形而上學の零るや沙羅（しゃら）の花

秋彼岸部屋に白紙の置手紙

参　アルカディアの記憶

さよならの象（かたち）

海市消え一島描(か)かれぬ古き地圖

近松忌袂（たもと）からまる影繪かな

紫陽花（あぢさゐ）の黄昏を摘む指の先

黒南風（くろはえ）や井戸の底なるベルメール

風琴（オルガン）の黒鍵に触（ふ）る涅槃西風（ねはんにし）

蟬丸忌さすらふ指を琵琶の墓

（せみまるき）

水無月や弔花を叩く雨の白

さよならの象（かたち）は白しかきつばた

いちめんの菜花畠（なはなばたけ）やサティの死

B面に猫

雪螢ふはふはふはと一世（ひとよ）限り

海ゆかば螢一列そのなかに

九月盡錆びた過去(むかし)に鍵をかけ(くぐわつじん)

祭日や豫報はかなく青嵐

空蟬や翅（はね）より腐蝕はじまりぬ

銀化する遅さで歩む蝸牛（くわぎう）かな

氷河期の痕跡なきや螢烏賊

B面のピアフのみ聴く啄木忌

春ですねアルカイックに猫笑ふ

磨滅のイコン

受難節踏繪のイコン磨滅せり

祝祭や海鼠（なまこ）殺して獨り酌（く）む

凩（こがらし）や廃都（はいと）の證香（あかし）るのみ

地面より千木（ちぎ）を仰ぎぬ建國日

猿澤の月や薄氷（うすらひ）割るる音

質量を持たざる巌（いは）に雪化粧

探梅や紙人形へさす口紅（ルージュ）

花一輪これを越ゆれば春一輪

最果ての原野の虚（うろ）の凍鶴よ

デジタルの花言葉

除夜の鐘デジタルの文字竝ぶかな

獨り居や五人囃子へ弓を引く

立ち昇るその香（か）青きや柏餅

紫陽花（あぢさゐ）や花言葉ごと雨へ棄つ

梔子（くちなし）の雌蘂（めしべ）に触るる薬指

死の淵の蟻へ眞晝の光かな

行夏や五分遅らす腕時計

法師蟬落ちてしづまる木立かな

あはれ秋風よ情あらば

生きめやも秋刀魚は今も苦きかな

青の沈殿

友の忌や骨の髄まで冴ゆる月

龍膽（りんだう）の青そのままを疊みけり

銀木犀零れ芳香尽きにけり

秋深し翳（かげ）に隠せしこの身かな

炎獄（れんごく）の底に居りしは去年の彼岸まで

水無月の雨羊水の温(ぬく)みかな

芒原（すすきはら）ただ事ならぬ白さかな

水澄むや夜を沈めし底の青

蟻地獄召さるるまでの遊戯かな

石の耳、氷の目

萬愚節すべての窻に喇叭（らっぱ）鳴り

稲妻の轟き愛猫石となす

ギオロンの弦（いと）断ちてより冬の雷（らい）

線香花火　十秒間を亂れ咲く

冷奴突き崩さうか獨りきり

亡き人形（ひと）の膚（はだへ）を偲ぶ半夏生（はんげしやう）

隻眼（せきがん）の雛（ひひな）を愛づる祭かな

いまだ見ぬ夢の終焉（をはり）や姥桜（うばざくら）

薄氷（うすらひ）やわたしが私を射る夜明

鏡の影を鳥渡る

探偵小説（ミステリ）や未完のままに沙羅（しゃら）の花

夏館（なつやかた）　鏡一枚あるばかり

晝寢覺狂へる畫家（ひるねざめがか）の耳に穴

昏れ泥(なづ)む空を蹴り蹴る夏少女

ジョルジョ・デ・キリコ

秋陽射すローマ広場を影の塔

蝸牛　バベルの圖書館経巡(へめぐ)りて

わが歩む徒花（あだはな）のみの咲く花野

聖壇に檸檬をひとつ遺(のこ)し去る

永遠（とは）を飛ぶ気球の翳（かげ）や鳥渡る

魂(たま)あそび

金木犀光凝（こご）れる街角に

闇を漕ぎ香りを辿(たど)る花見かな

月光を孕(はら)めば籠目かごの鳥

無花果（いちじく）やフランツ・カフカ婚約す

アルカディアにゐたことはなし夕月夜

絶海の鳥もかよはぬ花野かな

断首さる無辜の牡丹の白に咲く

節分の鬼のいぬまの魂（たま）あそび

童（わらべ）らの花いちもんめ櫻落つ

肆　熾天使の吐息

ネヴーアランドにて

ノイシュヴァンシュタイン城

狂王の未生（みしやう）の城を鳥渡る

春愁やネヴァーランドの明けぬ夜

紅（くれなゐ）に蕊（しべ）まで濡れて罌粟（けし）の花

密室に謎を据ゑたる雛（ひひな）かな

満月や古地圖に砂丘ある如く

水銀柱見詰め續ける大暑かな

しんしんとガラスの雪の降る痛み

熾天使（セラフィム）の吐息は凍（い）てし金木犀

トーストの焼ける匂ひや今朝の秋

忘却に紅を

神の子の象（かたち）に揚羽展翅せり

散る櫻わが身の記憶棄つる風

春疾風（はるはやて）五時の始発の汽車を待つ

菜の花を解體新書の栞とし

梅雨明やもつとも高い聲を出す

炎帝や碧眼僧の過ぐるのみ

佐保川の櫻に紅（べに）をひとしづく

小(ち)さきもの抱(いだ)き眠るも利休の忌

風を受けたちまち割るる石鹸玉（しやぼんだま）

曠野へ

朧夜の朧濾(こ)せざる籠目の目

煤拂ふ位牌のうらに杢目かな（すすはら／もくめ）

虞美人草喪失といふ夜の瑕（きず）

向日葵（ひまはり）や日南中時（ひなんちうじ）の影を食ふ

祖國喪失者（デラシネ）や無殘に枯るる水中花

奈良卦町（ならけまち）振り向きざまの鎌鼬（かまいたち）

寒卵（かんたまご）幾何學的に生きめやも

野遊(のあそび)や一年分の嘘を吐(つ)く

雪が降るわたしの曠野（かうや）へ降り積もる

エウレカの鸚鵡

薔薇深紅　奥処（おくか）にひそむ刺客かな

雪の夜や香り殺(あや)めて白の底

山鳥頭伽藍の壁の崩るる夜

（とりかぶと）

麦秋の空にゴッホの鴉かな

鯉幟（こいのぼり）哀しいまでに晴れにけり

罌粟（けし）の花ゲームのごとき虚構（うきょ）かな

半夏雨（はんげう）や鱗（お）の生ゆる日の記憶

夏の夜や寝汗の芯に針の夢

エウレカ！と叫べ鸚鵡の言葉にて

薔薇の名前、あるいは黙示録

ゴルゴタの蝶を釘打つ夜明けかな

花冷や世界の終焉（をはり）のやうな寺

野良犬の牙の濕りや皐月闇（さつきやみ）

武者人形匣の中身はまたも匣

葉櫻や花の死後降る花の雨

ラストワルツ聴きつつ潰す蛇苺

廊下より廊下の湧ける朧かな

霎（みぞ）るるや静かに炎ゆる金閣寺

圖書舘の薔薇の名前を冬銀河

黒の回帰（リフレイン）

梅月夜あの世めぐりの至福かな

珈琲に地獄の夜やペチカ燃ゆ

椿落ち土に還るといふ定理

やはらかき吐息ももいろ春の雷

千億の夜を号（おら）びて初櫻

寒月や毬藻（まりも）に毬藻重なりて

偶（たまさ）かに生承くものや流し雛

如月や夜明けの青き底深し

水無月の町に草むす甍（いらか）かな

朱(あか)きをさす

遠雷や空き地に漆黒（くろ）きドラム罐

最果てや摩滅の句碑に霜柱

蝸牛（かたつむり）渦巻く過去の咎（とが）の數

夏日蔭肉の襞なす紙人形（なつひかげ）

海酸漿（うみほほづき）無數の惡夢飼ひにけり

聖堂の異形の薔薇の屍骸かな

朝曇ミルクの底に沈む闇
（あさぐもり）

暮れ泥(なづ)む躑躅(つつじ)の蜜の甘かりき

透明なゼリーに朱（あか）さすデギタリス

水葬への階梯

居心地の悪き座蒲團春隣

儀式として牡蠣の殻割る夕餉（ゆふげ）かな

麗らかやポストばかりの竝ぶ舗道（みち）

一列は菜花漬（なのはなづけ）の黄色のみ

水平にたゆたふものに春霞

青空に賣繪（うりゑ）のごとき櫻かな

だしぬけに鸚哥（いんこ）の放つサクラサク

春風や心を病みし王女の忌

朧夜や書架に「水葬物語」

伍　幻聴の諧謔

陰畫（いんぐわ）の舟に積む

海かをる香(かう)焚く一日(ひとひ)ランボォ忌

冷酒やしみじみ聴けば八代亜紀

霜柱一行の謎彳（た）ちにけり

遁走の睦月をゆけり此処（ここ）よりは

音も無く廻れ木馬よ去年今年（こぞことし）

鶴と亀すべりし夜の謀(はか)り事

我すでに他者かも知れぬボルヘス忌

凍蝶（いてふ）や翅（はね）の奥処（おくか）に夢を噛む

陰畫（いんぐわ）にて舟みるごとき夕立（ゆだち）かな

銀河を割る

福壽草きつと前世で見し黄色

濡れてゐる坂の果てにて涅槃西風（ねはんにし）

雪の夜や名もなき驛を默殺し

斃（たふ）れざま極樂みたり雪景色

寒卵垂直水平異常なし

冬銀河ときに未來を記憶せよ

木枯しは一方向に吹いてゐる

枯野には朝陽届かぬ場所もあり

薄氷（うすらひ）を割る悦楽も絶望も

まぼろしの半旗

日は落ちて地中へ還る秋の蟬

福音やレースの胸に薔薇の翳

春宵やパズルの桝は白く暮れ

勿忘草（わすれなぐさ）少女心中するごとく

銀器もて苺のあたま潰しけり

デカルトの證明ありて海市消ゆ

皐月晴まぼろしの旗半旗にて

武者人形の横顔凛々し兄は無し

いまは亡き黒き外套消えて闇

マラルメの海峡

夜半（よは）更（ふ）けて猫長くなる春炬燵

賢人になりたくもなし萬愚節

蜃氣樓戀は遊戯（ゲーム）と覺へけり

朧夜や二次元のみに懸想（けそう）する

眞夜の湯や一匹の蟻溺死する

煉獄や赤色揚羽あがく音

春まだき悪夢を研ぎて鏡とし

マラルメの氷面（ひも）なる詩句の溶けざるを

韃靼海峡の蝶たちに

冬衛忌の海峡青く潰えけり

記憶の匂ひ

夜想曲（ノクターン）　一音にして秋の風

むしのねや獣（しじま）に水銀ひとしづく

東山魁夷のごとく秋木立

金木犀記憶の果てを金に染(そ)む

家電量販店の店頭

ショウウインドウ

飾り窓の無数の空を鳥渡る

夜半（よは）も過ぎ秋のうれひを積む列車

老嬢の耳朶（じだ）の薄さよ薄紅葉

秋の日やセガンティーニの死の光

幻聴にあらがひひとり秋祭

數億の夏

古代魚の眼に數億の夏みたり

夏雲のむかうにはるか少年期

廢薗や惡事のいろを罌粟の花

白薔薇や曠野（あらの）へ曝すポオの骨

満月を盗みて捌（さば）く詐欺師かな

暑き夜や惨劇（ホラァ）を愛づる赤き椅子

夏館（なつやかた）聖域を編む籐の椅子

永劫の闇を契（ちぎ）るか流れ星

黙契のごとく春月南中す

風の供物

球體に秋風そなふ無銘の碑

黒薔薇や忘れちまつた花言葉

睦言や枕邊に活(い)く寒牡丹

曼珠沙華花瓣重ねて蔭を飼ふ

裏庭に音無く秋の散りにけり

未練とは火鉢の隅に残る熾（おき）

漆黒の夢なら夢と梅月夜

探偵の解かぬ謎あり冬籠

神無月夜明けを待てる影の影

毒食(は)めばワルツ

雨音のピアノ愛(かな)しき梅雨入(つゆいり)かな

儚く麗しき一脚の倚子

餘花（よか）散るやミス・ブランチの白髪に

稲妻やあぶなゑの端（は）に猪口ふたつ

消ゆる火に戀弔（とむら）へば大文字

憂鬱を寝酒に混ぜる櫻桃忌

螢狩死者のたましひ狩るごとく

斑猫（はんめう）やさきくさきくと影法師

惑星に病葉（わくらば）墜ちる音を聴く

夜鳴き蕎麥はじめに湯氣を啜りけり

陸　銀（しろがね）の福音

人形たちの夏

前（さき）の世の終（つひ）の白とは桃の花

實らぬを花とも呼ばむ風の華

九月尽（くぐわつじん）みな聞き捨てし雨の音

除夜の鐘　神骰子（さいころ）を振るばかり

夏の果貌（かほ）なきものの濡れにけり

行夏や木偶（でく）人形に義手義足

梅雨冷や紙人形の密事（つゆびえやかみにんぎょうのみそかごと）

ル・コルビュジェ

立秋や伽藍の骨の白きこと

ゆふやけて見えぬ雲追ふ一羽かな

修羅の惑星（ほし）にて

ベラドンナ瞳にひたと毒の充つ

ぐつたりとのつたりとある夏の午後

梅雨明やこの世はすでに色もなし

巴里祭（パリさい）や晴のち曇　阿鼻叫喚

曹達（ソーダ）水ぬるく未完のままにあり

異國語ガ聞コエテキマス春隣

朱(あか)きもの過(よ)ぎりて去らむ皐月闇

數世紀動かぬままよ蝸牛（かたつむり）

邊疆（へんきやう）の修羅の惑星（ほし）にも春の雪

蜃気楼への墓標

受精後のねむき殻なり蝸牛（かたつむり）

梅雨寒や怪奇（ホラァ）映畫の蜜を吸ふ

あぢさゐの彩（あや）に過（あやま）つ眩暈（めまひ）かな

朽野（くだらの）にゆめまぼろしの廃都かな

入梅や階段増ゆる音のせり

おもひでの數ほどあやめかきつばた

しあはせやゆめ醒めぎはの猫の戀

箱庭や風の墓標を編み終はる

蜃氣樓ゆめの痕より老いにけり

地下室の櫻貝

紫陽花（あぢさゐ）の軒より消えし行方（ゆくへ）かな

躑躅（つつじ）炎ゆ蜂ならぬもの蜜に酔ふ

菜種梅雨着ていくべきや行かざるや（なたねづゆ）

吉野家の軒にひとりのつばくらめ

死に果てし春や未遂の乳母車

葉櫻や地下室のみの家に棲み

根源にあはき色ありさくらがひ

萬愚節愚者は愚者なり愚者の群

夜櫻やのつぺらぼうの貌（かほ）と貌

雛の通夜

記憶はや海市を抱(いだ)き溶けはじむ

一夜目は石なる桃を買へといふ

零余子飯（むかご）むかしむかしの雲のいろ

鍵束の鍵減りにけり四月盡（しぐわつじん）

ちりぎはを命と定む櫻かな

猿澤や月光のみ積む貨車二輛

匂ひなき臘梅刻む銅版畫

緋毛氈（ひまうせん）二夜目（にやめ）は雛のなき座かな

何処（いづく）より何処へ去らむ春疾風（はるはやて）

聲の匣

木犀や時代（とき）の乾きに舟を漕ぐ

樂園と地獄の隙（すき）を百舌鳥の聲

すききらひすききらひすき秋櫻

亡き人へ書きさらに消し　冬霞

曼珠沙華（まんじゆしやげ）

生者必滅會者定離（しやうじやひつめつゑしやぢやうり）

とほりやんせ一聲高く百舌鳥の贄（にえ）

かもめ来よ聲の化石を砕くべく

満天に陰謀みちて二百十日かな

九月盡（くぐわつじん）パンドラの匣（はこ）閉ぢにけり

漆黒なる晩夏

陽炎（かげろふ）や生まれるまへに在る疼き

世に倦めば夜目に妖しき虞美人草（ぐびじんさう）

唖者（あしや）として過ぐるや八月十五日

蚊遣香（かやりかう）灰のみ殘す餘白かな

片戀（かたこい）のマリアへ贈るベラドンナ

神曲を焚書せし日や蟻地獄

人が消え雨傘が消え夏が消え

残り香（が）といふ妄執や雷雨くる

漆黒の電柱竝(なら)ぶ晩夏かな

神なる偽卵

聲すべて空に吸はれし夜の秋

眼醒（めざ）めては秋の氣配と寢てゐたり

隊商（たいしやう）は月の沙漠の銀ならむ

夏の果て偽卵に語る鸚哥（いんこ）かな

廃驛（はいえき）にマヌカン貳體（にたい）

月煌々

秋燈（しうたう）のそこだけ照らす曠野（かうや）かな

花野にはみえない小屋の扉かな

尖塔を鳥渡る日や大聖堂

神を見るたとへば晩夏の岬にて

漆　蒼穹の闇

錆びゆく金貨

秋櫻（コスモス）や空いつぱいに空の涯（は）て

春月や河馬に真珠といふ遺訓（いくん）

一光年隔てて燈（とも）る烏瓜

默契のごとく窓より圓（まる）き月

梅散るや闇の繊維を白く編む

あゝジュラ紀　海のあをくも寒椿

河骨（かうほね）や金貨沈める青の淵

北原白秋「片戀」

病める日や黄金（こがね）に枯葉ちるぞえな

冬虹や鉄路の錆の軋みゆく

あるひは不在證明

蜻蛉（せいれい）や刻一点（こくいつてん）を展翅せり

息白き（ではさやうなら）で足りてなほ

不在證明とりにゆく日や冬麗（ふゆうらら）

ゆふがほや月曜といふ石の嵩（かさ）

凍蝶や石女（うまずめ）といふ石の座に

白南風（しらはえ）にTシャツ白を孕みけり

如月や鉛直をなす松葉杖

戦死者の默（しじま）の數や蟬時雨

孤閨かなデジタル文字の熱帯夜

光の默劇

眞鍮の蟻の行軍正午（まひる）なり

蟷螂（たうらう）の斧の眞赤に錆び極（きは）む

肋骨や檸檬の酸に溶けざるを

春の雪大地に觸るるまへに消ゆ

空蟬の空色の眼の空の色

靜脈を切り裂くあそび鳥兜（とりかぶと）

聖夜なりざわめく影と聖歌隊

銅版に無月を刻み刷りにけり

渚にはおそらく冬の降るばかり

腐蝕の儀式

菊を剥き菊人形の菊の錆

たうがらし干して陶器の獣（しじま）かな

鏡中や肉なき肉の鎌鼬（かまいたち）

黒葡萄潰す黒衣の内に虚（うろ）

無花果を濆(けが)してまはる赤き唇(くち)

林檎剥く螺旋を吊れるわが闇に

憂國忌ひりりと鈍き出刃庖丁

俳人死せば風葬ののち風花す

やはらかく裸足（はだし）の沈む花野かな

穹（そら）の廃墟

春畫（しゆんちう）の表舞臺に奈落かな

黄信號ただ點滅す神の留守

啓蟄（けいちつ）の夜汽車や缺伸（あくび）殺しつつ

一滴の朧したたるタまぐれ

白梅の白におくれて匂ひけり

冬銀河めくれしあとの月の穴

雪女穹（そら）の廃墟にひとりかな

牡蠣（かき）の身を護るべくして鐵の處女

臘梅の香り夜陰に乗じけり

機械仕掛けの暗黒郷

冬籠にどとおもてにでぬひと、と

聖夜（イヴ）の街神も安賣（やすうり）されたまふ

教會の鐘の音（ね）黑き雪と降れ

いまそこにドラキュラがゐる冬薔薇（ふゆさうび）

雪の華咲かず來たりて散りて去る

日向ぼこ暗黒郷（ユウトピア）にゐし記憶

星月夜　満天機械仕掛かな

秋深し故郷の闇を棲処（すみか）とし

降臨はまだかと冬の蝸牛

彼岸の遊戯

秋櫻（あきざくら）散るときこの世散るらしき

そぞろさむ運命線のうすきかな

あきかぜやペコちゃんの首ゆれやまず

ひと歳（とせ）をかをりと埋づむ金木犀

パスタ刺す紅一點や蕃椒（たうがらし）

あきざくら彼岸でおあひしませうね

冬の蝶天使の翅をたたみ死す

世阿彌忌やただしんしんと砂時計

夜の秋地下水汲みて煮る遊戯（あそび）

十七文字の柩

神去りし穹（そら）の深さや散るさくら

あかみどりきんぎんしろや聖誕祭

梟のごとく眠れるごとくあり

雪原を征く空腹を癒やすため

漱石忌夢の奥なる夢のあり

傷心の泡と消えしや曹達水（ソオダ）

北極を射せる古地圖や星今宵

ランボオ忌　おゝ！蒼穹（あをぞら）の倒れくる

青薔薇や十七文字を柩とし

捌　永遠のロゴス

眞水の一献（いっこん）

朧夜や背中の釦（ボタン）掛け違ひ

冬ざれや野の花吸ひし土の色

一畫（いつくわく）は淡雪のこす無縁塚

テオ・アンゲロプロス「霧の中の風景」

神さぶる一木（いちぼく）霧を従へて

晩春のそも晩年の影にして

王座いま虚（うつろ）に耐へて聖夜かな

降る雪やあやとり遊戯（あそび）果てもなし

眞水にて終（つひ）の一献（いっこん）憂國忌

風花やここより夢の絶えし蹟（あと）

漂泊の一夜

鰯雲忘れ去るべきことの數

片はれのピアス棄つるや梅月夜

松籟（しやうらい）に神の聲聴く紀元節

白晝（はくちう）の耳鳴りなりや蟬時雨

いつかみし龍はむかしの鯉のぼり

催花雨（さいかう）を蒲団に聴きて獨りかな

彼岸西風（ひがんにし）渡りきれざる橋のあり

座布團を鎭座ましまします春の猫

漂泊といへど一夜の花盛り

セロファンの風

鞦韆（しうせん）や重力といふ地の軛（くびき）

驟雨（しゅう）来て艶（つや）なき肩の骨にまで

雷光やひとり眼覚むる自鳴琴（オルゴール）

螢（ほうたる）の背に原罪の光かな

羅（うすもの）やひとの心の透きはせず

病床の香水壜の指紋かな

更衣捨つる名前の重きかな（ころもがへ）

春の風青きセロファン編み累（かさ）ね

葉櫻の切符一枚黄泉國（よもつ）まで

無月の穹

月光の蒼に透ききる胸の骨

ベルエポックなりし金木犀の露地

銀漢や錐の穿(うが)ちし孔(あな)あまた

少年よ昨日の蟻をまづ殺せ

凍てつくや錠溫(ぬく)むれば解くる謎

死者積める樂園を吹く涅槃西風（ねはんにし）

不在證明（アリバイ）の城崩れ落つ晩夏かな

水芭蕉咲き亂るるは死後の景

眼裏（まなうら）の空に無月を放ちけり

比良坂の雛

月光の零れぬやうに　掌（たなごころ）

曼珠沙華ニヒルなまでに緋(あか)きかな

牡蠣を吸ふシェヘラザアドの耳として

螢賣ひかりあつめて賣る螢（ほたるうり）

眞つ青な穹(そら)眞つ白な敗戰忌

シューベルト「野ばら」

ゆふぐれの荊棘（いばら）は見たり童の死

歳の瀬や混線しきる絲電話

比良坂へ瞶（めしひ）し雛（ひひな）ただひとり

小林秀雄「無常といふこと」

ちる櫻　無常といふことその無常

薔薇の星花火

朧月迷路あやなす街に棲み

やはらかき雨に解(ほど)けて春の月

薔薇よかの屋敷はすでに廃墟です

空蝉の虚（うつろ）を殺す膂力（りょりょく）かな

蝶は夜、花束となり空を滿つ

ひとつづつ墜ちては消ゆる春の雪

散りて咲く菖蒲（あやめ）紫、紫へ

眼覺むればつづく惡夢や熱帶夜

劇終や街消え失せて星花火（フィナーレ）

ロゴス絶えし日

追憶や路地に一事の百日紅（さるすべり）

無花果や花の痕跡（あと）なき斷面圖

蒸氣機關車停まる氣配を朱夏の驛

ポール・デルヴォー「La Gare forestière」

晝寢覺まだデルヴォーの驛の中

ひるねざめ

蝶ふたつワルツ刻めば白き夜

白き息遺して街を忽然と

煮凝（にこごり）や凶事の箸に震へをり

いつせいに椿墜(お)ちたる無言劇

ゴルゴタの丘に言葉（ロゴス）の絶えし春

ただ永遠を

眞晝間の閉じぬ暗黒蟻地獄

大枯野棒が一本直立す

夏の雲北へ北へと消えにけり

マルセル・デュシャン

聖なる夜されど死するは他人のみ

砂濱や複數で書く冬の薔薇

午後遅き理科室にある鵙（もず）の贄（にえ）

蝸牛（かたつむり）銀の迷路へ誘（さそ）ふ夜

朧夜やショパン舟歌鼻歌に

永遠を！ただ永遠をランボオ忌

玖　黒映画（シネマノワール）の振子

セラヴィの鏡

酒瓶の葡萄牙（ポルトガル）語や白秋忌

たんぽぽのぽのいろのみを愛しけり

縁日に小春日和を買ひました

夜半（よは）も過ぎ燦（きら）めく闇を蟲の聲

春、此処（ここ）に建ててゐたのは何だつけ

行春や肩竦（すく）めつつウイセラヴィ

鼻母音（びぼいん）のごとき溜息薄暑光

白菊や告別の円舞曲（わかれワルツ）はじまりぬ

朝寒（あさざむ）の鏡のなかの悪意かな

神無月の鳥籠

贋金（にせがね）のごとく満月吊られけり

空つぽの鳥籠空つぽ四月盡（しぐわつじん）

午前二時二條大路に虹たつや

拳銃を紐で縛つて四月馬鹿

西陣に露地の数多（あまた）や一葉忌

唯我獨尊（ゆいがどくそん）といへどいはゆる石鹼玉（しやぼんだま）

四迷忌や新聞いまだ來ない朝

都にて産まれ四萬六千日（しまんろくせんにち）

サミュエル・ベケット「ゴドーを待ちながら」

神無月今宵ベケット待ちにけり

金閣と毒藥

青葡萄愛のごとくに嚥下（えんげ）せよ

薔薇散るやむかうに炎（も）ゆる金閣寺

白薔薇やモノクロームの闇を剪る

花屑へ紅(あか)き毒薬ひとしづく

海酸漿（うみほほづき）のロココ衣裳に死を憶（おも）へ

淫夢果て枕邊（まくらべ）に咲く寒牡丹

亂れ咲く野百合は白き生殖器

後朝（きぬぎぬ）やあはせ鏡にちる櫻

邪（よこしま）な處女の瞳にベラドンナ

冥府の振子

葉櫻や電車待つ間（ま）に數世紀

古暈けた雛（ひひな）のかほに眉をひく

謀略に満ち叛逆の良夜かな

螢烏賊夕餉（ゆふげ）の卓に默示錄

日向ぼこ鸚鵡と交はす疑似會話

豫兆（よてふ）なく振子停まりし木の芽時

野分して野（のべ）邊の送りの以前以後

喪失はうしなふことよ四月盡（しぐわつじん）

唖蝉（おしぜみ）やむかし冥府へ旅にでた

靡かぬ半旗

寒卵　鉛直のみを信じつつ

質量を持たざるものや雪しんしん

年々歳々あと幾たびの櫻かな

凩（こがらし）やカフカの聲を聞きもらす

人はただ一陣の風女郎花（をみなへし）

鬱の字を草書にくづす入梅(ついり)かな

バタイユ忌神の夢見てゐる世界

十二月八日白磁の皿の白きかな

春の日の風に靡(なび)かぬ半旗かな

十億年の冬薔薇

空き箱や十億年の神の留守

アラン・ポオ鳥葬の地に佇みて

神座（かむくら）にゐる大鴉啼かざりし

茅蜩（ひぐらし）よ二度とこの夜は明けませぬ

玻璃（はり）

流刑（るけい）

薊（あざみ）

纏足（てんそく）

涅槃西風（ねはんにし）

人體のあまたの穴を充たす夏

むしのねや金と銀とのものがたり

残菊や弥勒菩薩のさきを視（み）し

意味なさぬ花言葉あり冬薔薇（ふゆさうび）

傷つくも花荊棘（はないばら）

姥櫻（うばざくら）昔日の戀ちりぬるを

霞草しあはせといふこはれもの

四葩（よひら）ならむかし何処（どこ）にもあつた花

掌（てのひら）のうへの空蝉吹きにけり

扉開け蟬の祝福浴びにけり

われらまた滅ぶ日あらむ西行忌

一人減りまた一人減り月蝕忌

薄氷（うすらひ）の薄きこの世のうすさかな

傷つくもまた傷つける花荊棘（はないばら）

ひらかなの黒夢（こくむ）

人知れず逝くべきときを福壽草

黄落やジャコメッティに會つた徑（みち）

雪蟲やおもひの重さはかるべし

きみ知るや紫陽花の花朽ちる音

ときは春ひらかなのみの届く晨（あさ）

海邊来て薄暑の空を肺に飼ふ

十日煮て煮凝（にこご）るまでの黒夢（こくむ）かな

七夕や永遠（とは）に未遂の物語

長き夜や黒き映畫（シネマノワール）の闇に死す

境界線上の漂泊者□影なき編集者による跋

この句集「風の剥製」を貫く現実の裏表を射抜く視線は、極私的な記憶と巨大な虚無を十七音に凝縮し、言葉を煌めく刃へと変貌させ研ぎ澄ます。それは形なき時間を言葉の石膏で固める刑執行であり、虚構を吸入して永遠を希求する過酷な試みでもある。ここに収録された六八九句に及ぶ断章は、腐蝕に抗い最果てに辿り着いた精神の記録である。

この書物の中で、読者は鏡の中を渡る影を追うように、生と死のあわいに立ち止まり、日常に潜むささやかな奇蹟や凄絶な恩寵を凝視することになるだろう。風の剥製となった言葉がふたたび命を宿すとき、漆黒の幕が上がり未遂の物語が呼吸を始める。その一瞬に拓ける蒼き空こそが、孤独な魂の「心の茣」となり、深淵の先へと続いてゆくのである。

京都西陣に生まれ、紫野にて育つ
京都市立紫野高等学校卒業
京都大学工学部建築学科卒業
京都大学大学院工学研究科修了
大阪藝術大学藝術学部教員の傍ら建築家として活動するも、病を得て設計活動を休止
その後、本格的に句作を始める